

第3講：異文化伝道論 2—コンゴでの伝道とその課題—

内戦からの復興と、信仰の土台をつくった「教義研修会」

コンゴ共和国では1990年代に数度にわたる内戦があり、コンゴブラザビル教会も大きな被害を受けた。そこからの復興の歩みにおいて、活動の中心となったのが「教義研修会」である。天理教海外部（フランス語スタッフ）の主導の下で1週間から10日間のプログラムが組まれ、そのなかで教義（教典や教祖伝、「みかぐらうた」など）の講義、おてふりや鳴物の修得、にをいがけ、ひのきしん、グループワークなどが行われている。現在、教会に集う人々の大半がこの研修会を受講している。最近ではコンゴ人講師の育成も進んでおり、特に入門クラスは現地の人々の手によって開催されるようになった。教会にはかつてのように常駐する日本人布教師が不在であるため、こうした教会活動の「自立」を促していく必要がある。

この研修会の成果としては、「意味がよく分からないまま実践していた」時代とは異なり、信仰が教義理解によって意味づけられ、「定着」するようになった点が挙げられる。そして、コンゴ人の信仰が世代を越えて継承されるようになった現在、さまざまな面で信仰実践の「現地化」が展開されつつある。

「現地化」と新たな「文化」

その代表例がコーラス活動である。内戦からの復興期に信者たちが自発的に始めた歌がきっかけとなり、2000年代初頭にコーラス隊が結成された。現在では100曲以上のレパートリーがある。歌詞は「親神様のご守護」や「教祖のひながた」に関するものをはじめ、「信仰の大切さ」や「教会への誘い」といったコンゴ人の日常に呼びかけるものも多い。今やコーラス隊は月次祭の祭典後には欠かせない存在となっているが、地域や国の行事に教会として参加する際にも披露され、にをいがけにも一役買っている。公用語のフランス語や教会周辺地域で広く流通しているラリ語だけでなく、国語であるリンガラ語やムヌクトゥバ語でも歌われており、多くの人々に理解されやすい。これまではCDアルバムが制作されていたが、昨今はSNS上のプロモーションビデオの制作にも力を入れている。

信仰が2世、3世へと受け継がれるなかで、日常生活における「儀礼」も定着し始めた。教会での結婚式や信者の子どもの誕生の祝福、また天理教式の葬儀も教会で執り行われるようになってきている。カトリックが大半を占めるコンゴでは墓標のほとんどが十字架であるが、天理教式の墓標も新たに作られた。さらに、地理的・経済的理由から「おぢば」へ帰ることが困難であるため、天理教に「入信した」ことを自他ともに認識できる機会として「入信の儀」が設けられた。

子ども向けの活動も盛んである。2000年から始まった「子どもの祭り」は、教会本部の「こどもおぢばがえり」をモデルとし、その期間に合わせて開催されている。運動会やさまざまなゲームなどのお楽しみ行事のほか、周辺の清掃ひのき

しんやおつとめ総会を行い、教えに触れる機会にもなっている。子どもたちが集まるこのイベントは、娯楽の少ない社会では注目されており、最近ではSNSを通じて周辺地域からも広く参加者が集まっている。なお、コンゴでは少年会も教会設立40周年の折に結成されており、日頃の鼓笛隊活動をはじめ、毎月第4日曜日を「子どもの祭典日」としておつとめまなびを行っている。

社会貢献と経済的自立

教会における活動は、地域の教育や雇用を支える社会貢献活動とも連動している。教育面では、教会が運営する「天理総合教育施設」が大きな役割を果たしている。内戦以降、公立学校は教員不足や給与の未払いなどの問題を抱え、教育水準が低下していた。そこで同施設は、質の高い教育を他の私立学校よりも手頃な授業料で提供し、注目を集めることとなった。さらに、全国統一の試験でも合格率が地域でもトップクラスだったので、2010年には700名を超える児童・生徒を抱える人気の学校へと発展した。昨今は私立学校が乱立し、生徒獲得の競争も激化しているため、試験の合格率だけでなく、教育内容や設備のさらなる充実が求められている。

これらの活動を維持するためには資金が必要となるが、教会の「経済的自立」を目指し、使っていない土地やテナントの賃貸、農園の運営といった収益事業も行っている。これは教会の財政基盤を支えるだけでなく、若者の失業が深刻な都市部において「雇用の場」を創出するという、重要な社会貢献としての側面も持っている。

教会設立60周年の節目と課題

1966年に設立されたコンゴブラザビル教会は、今年で設立60周年を迎える。文化や習慣が大きく異なるアフリカ・コンゴにおけるこれまでの歩みは、まさに「異文化伝道の最前線」と呼ぶにふさわしい。この60年間には、他地域では見られない特有の課題に直面し、決して順風満帆な道のりではなかった。しかし現在では、現地の人々が主体となって教会を運営し、地域社会に貢献する姿も見られるなど、過去の歩みと比較して大きな進展を遂げたと言えるだろう。

一方で、アフリカへ進出している日本の宗教と比較した場合、信者数の面において依然として大きな差をつけられているという客観的な現実も存在する。もちろん、布教伝道の本質は数値のみで測れるものではないだろうが、南北アメリカや東南アジア、ヨーロッパなど、天理教が布教を展開している他の地域でも同様の傾向が見られる実状を踏まえると、「なぜこのような差が生じるのか」を客観的に分析することは重要だと思われる。その上で、地域や時代の変化に即した布教のあり方を模索していく必要があり、それこそが「海外伝道の後方支援」を担うおやさと研究所に課された課題の一つではないかと考える。